

# 介護の悲劇防ぐため

介護による行き場のない苦しみを高齢者に向けてしまう介護者が後を絶たない。高齢者、介護者の双方を支援しようと、「高齢者への暴力防止プロジェクト助成」（朝日新聞厚生文化事業団、朝日新聞社主催）を受ける全国12団体が決まった。助成額は総額1010万円。助成対象団体の中から、2団体の活動を紹介する。

## 酒飲み語り 男性息抜き

### 杉並介護者応援団

介護する人が孤立しないよう、悩みや不安を語り合える場を作りたい――。東京都のNPO法人「杉並介護者応援団」は6年前から、同区内で行政と連携しながら介護者の会を運営している。もとは、区主催の介護者サポーター養成講座の修了生の有志が結成。今では、同応援団の関わる介護者の会は区内に10カ所、年間延べ約1千人が集う場になっている。訪れた介護者が「思わず怒鳴ってしまった

が、虐待ではないか」と涙ながらに語ることもしばしばだ。

最近、目立ってきたのが男性介護者の参加。介護に悩む男性は多い。しかし、会での語り合いでは、女性が苦労や不安感をとうとうと語るのに、男性はしゃべりにくそうだ。「男性だけで話せる場が必要だと感じた」と袴田栄一副理事(71)。

北原理良子理事長(62)は、男性介護者から「介護を始めてか

ら一度も居酒屋に行っていない」と悲しそうに言われたことが忘れられない。介護に追い詰められないためにも、時には、男性のライフスタイルにあった息抜きの場が必要だと思おうようになったという。

助成を活用し、「男性介護者の会」を設立する。特徴的なのが、月2回程度の開催を予定している「晩めし屋」。メンバーの一人で和食レストラン経営の経験をもつ戸谷嘉孝さん(76)らが中心となり、夕食作りから始め、食卓を囲み酒を飲みながら、男性介護者同士が語り合える場を目指す。(松浦祐子)

## 「高齢者への暴力防止」12団体助成



「晩めし屋」の開催に向けて準備を進めるメンバー＝東京都杉並区

### ■このほかの助成10団体

飯豊町老人クラブ連合会(山形)、サバイバルネット・ライフ(栃木)、エルダーアビーズ・ケア研究会(東京)、日本高齢者虐待防止センター(東京)、となりのかいご(神奈川)、介護支援の会松原ファミリー(大阪)、スマイルウェイ(兵庫)、おかやま成年後見サポートセンター(岡山)、高齢者虐待防止研究プロジェクト(福岡)、大牟田市社会福祉協議会(福岡)

## お年寄りに居場所を

### 地域密着型相談センターとまり木

「私たちがこの世にいるのは親のおかげ。なのに、粗末にするのは悲しい」。奈良市のNPO法人「地域密着型相談センター

とまり木」の山村悦子理事長(60)は、助成を受け、虐待を受けた高齢者が一時的に身を寄せられる場所を作ろうとしている。

2006年から、女性たちが悩みを相談できる環境づくりに取り組んできた。現在、スタッフ5人でNPOを運営。様々な電話相談や介護の勉強会、一人親家庭の子どものための催しといった幅広い活動を手がける。

最近、高齢者虐待の相談が目立つ。家庭で息子に殴られたり、施設で職員から暴力を受けた

高齢者を預かってもらえないか」と打診されたこともある。一方で、外との接触が少ない高齢者の虐待は表面化しにくく、行政の対応だけでは難しい局面もある、と感じてきた。

相談が増えるにつれ、お年寄り専用の居場所が必要、との思いを強くした。県内に部屋を借り、3、4人が泊まれるようパリアフリー工事を施す計画だ。日常生活はスタッフらで支え、介護が必要な人はケアマネジャーらに付き添ってもらおう。

「虐待の背景には、高齢者が身近にいない核家族化もあるのでは」。目標は、子どもや高齢者、障害者らが一緒に暮らすコミュニティだ。子どもが高齢者を敬う気持ちが育ち、接し方も身につくと期待する。「みんなに集まってもらえる『木』になりたい」(山田佳奈)



理事長の山村悦子さん(前列中央)とスタッフたち＝奈良市